

鎌谷嘉道氏の作文（綴り方）教育実践について

ON MR. YOSHIMICHI KAMATANI's Practice of Composition Teaching

国語科教育教室 菅原 稔

1

鎌谷嘉道氏（1921～）は、戦後、兵庫県姫路市内の小学校（船津小学校・山田小学校）で、文集を用いた作文（綴り方）教育実践に取り組み、多くの成果をあげられた方である。

鎌谷嘉道氏の作成された文集を、刊行年代順に示すと、次の表のようになる。

年 度	文集名称	号	総ページ	学年	勤 務 校
昭和28年	光 の 国	1～13	131	4	(神崎郡船津村立) 船津小学校
29年	青 空 の 子	1～11	206	5	〃
30年	た け の こ	1～6	374	6	〃
31年	麦 ぶ え	1～5	235	4	(神崎郡神南町立) 〃
32年	山 び こ	1～10	223	5	〃
33年	麦 ぶ え	1～3	206	6	(姫路市立) 〃
34年	た け の こ	1～3	172	5	〃
35年	芽 ば え	1～3	201	6	〃
36年	わ か く さ	1～3	162	5	〃
37年	えんぴつ文化	1～4	382	6	〃
38年	友 だ ち	1～3	114	6	〃
39年	た け の こ	1～3	151	4	〃
40年	城	1～3	142	5	(姫路市立) 山田小学校
41年	〃	4～5	89	6	〃
42年	青 空	1～3	167	4	〃
43年	〃	4～5	100	5	〃
44年	白 鳥	1～3	130	4	〃

鎌谷嘉道氏が教職につき（1951年—昭和26年—），萩原節男氏（※注）の指導によって文集を刊行しはじめた1953年（昭和28年）から、姫路市教育委員会に転出された1970年（昭和45年）までの17年間、文集の刊行が一度も途絶えることなく続けられている。

※注・萩原節男氏—戦前の「兵庫県綴方教育人連盟」の同人であり、また、戦後「兵庫作文の会」の事務局をつとめた（1952年—昭和27

年一から1960年一昭和35年一までの9年間）兵庫県西部の指導者である。

鎌谷嘉道氏が刊行された文集（15種83冊）の総ページ数は3185ページ、掲載されている児童の作品は3015編にのぼる。

鎌谷嘉道氏は、“文集”の意義を、父兄に対する文章の中で、次のように述べている。

日本語で思ったことがすらすら書けるようになる。生活を書くことによって反省し、よりよい生活をするようになる。友だちが書いた文を読み合うことによって、学級の者がお互いに理解を深める。

鎌谷嘉道氏にとって、文集は、単に児童の作文や詩をおさめただけの、記念碑的な“作品集”ではなかった。表現指導・生活指導の両面にわたるものとして、その教育実践のすべてにかかわるものとして、17年間、83冊にもものぼる文集が刊行し続けられたのである。

鎌谷嘉道氏が刊行された文集は、すべてB5版右開き、簡易製本（孔版印刷）であり、数枚の“一枚文集”を合冊したものである。

二

鎌谷嘉道氏の作成された文集は、それぞれがどのようなねらいを持って編集されているかによって、大きく次のように類別することができる。

1. 児童の「日記」・「作文」をもとにして文章表現力を高めようとするもの。
2. 国語科の学習指導の中で、感想文等を指導しようとするもの。
3. 児童の生活の中の問題（事件・出来事）を取り上げ、考えさせようとするもの。
4. 書くことと教科指導とを結びつけ、指導しようとするもの。
5. 次の学年（学校）への決意を書かせ、話し合わせようとするもの。

上のように類別することのできる“文集”のうち、いま「芽ばえ」「わかくさ」を取り上げ、考察を加えたい。

「芽ばえ」、「わかくさ」の目次は、それぞれ次のようになっている。

「芽ばえ」〈各文集の見出しのことばだけを取り出した。ただし()内は引用者がまとめたものである。〉

第1号（昭35・7・30）

- 1・はだかにされた中本君・(学級の中での“事件（出来事）”を訴えた作文1編と、それに対する感想を書いた短文14編)
- 2・算数ノート・国語ノートの使い方（ノート例4編）
- 3・魚とり日記・失敗日記（児童の日記5編）
- 4・もう一度考えてみよう、秩序のあるムダのない学級（児童の短文15編）
- 5・牛をつないだツバキの木・1：利助はけちか、海蔵はどんな人だろうか（児童の短文10編）
- 6・牛をつないだツバキの木・2：話しあいメモ（児童の短文10編）
- 7・牛をつないだツバキの木・3：エンピツ対談（対談記録3編）

8・おとうさんのけが（児童の作文1編）

9・夏休みにこれだけは

10・あとかぎ

第2号（昭35・12・24）

11・また橋波小学校にかかります。井上さんからの手紙（転校していった児童からの手紙1編）

12・ぼくが先生だったら私が先生だったら（児童の短文11編）

13・井上さんへの手紙（転校していった児童への手紙3編）

14・中川君、いいこと教えてあげる（転入してきた児童への手紙5編）

15・生活の変化に目をつける綴方日記を続けよう（2人の児童の日記3編ずつ6編）

16・わたしのにわたりの経営（児童作文1編）

17・小さな話、これは作文のなかにあった小さな話です（児童作文8編）

18・「炊飯器」を読んで（児童作文2編）

19・けんか（児童作文1編）

20・「けんか」を読んで（19に対する感想を書いた児童作文8編）

21・仲間おり（児童作文1編）

22・私たちの作文（児童作文3編）

第3号（昭36・3・23）

24・日記を続けよう、心に残る日記を（3人の児童の日記2編ずつ6編）

25・「貯金」を読んだのメモ（児童の短文10編）

26・自分のしたことを書く、詩の勉強（児童詩3編）

27・思い出、一番心に残っていること（児童作文4編）

28・書きなおすと作文はよくなる（1人の児童の作文を書き直させ、はじめの作文と並記したもの2編）

29・たのしい話題をさがす（児童作文6編）

30・卒業記念品（鎌谷嘉道氏の創作物語）

31・「卒業記念品」を読んで（30に対する児童の感想文7編）

32・なかまの中に問題をみつけて（児童作文2編）

33・たのしい話題をさがす（児童作文1編）

34・十年後のぼく十年後のわたし（児童の短文40編）

35・あとかぎ

「わかくさ」

第1号（昭36・7・25）

1・きのうしたこと話したこと、どのように思い出すか（児童作文4編）

2・ポリコ、この題で思い出すことを考えること（児童作文4編）

3・思い出し競争、バスをおりてから（児童作文2編）

4・「最後の授業」の考え読み（7人の児童のノート7編）

5・酸性とアルカリ性の実験（児童作文2編）

6・共同作文、いかに乗り（2人の児童が共同製作した作文1編）

7・仕事の作文（児童作文5編）

8・たのしい夏休みの設計

9・あとがき

第2号（昭37・1・1）

10・みんなでくわしくしよう，書きなおしの勉強（児童作文1編）

11・家族旅行（児童作文1編）

12・詩にはどんなことを書くか（児童詩4編）

13・おとうさんの旅行（児童作文1編）

14・「おとうさんの旅行」を読んで（13に対する感想文6編）

15・自分の思っていることと同じことがかいてあるとほんとにそうだと思う，そういう詩を書こう（児童詩14編）

16・生活を見る目をひろげる（児童詩5編）

17・便所掃除（児童詩1編）

18・なんでこんなくさいことを書いたのですか，「便所掃除」の感想（17に対する感想文8編）

19・この詩をどう考えるか（児童詩4編）

20・仕事のようにすがりありとつたわってくる詩（児童詩5編）

21・私はこう思う，「一台のエレベーターから」の感想（児童の感想文15編）

22・心のおくそこをぶちまけた詩（児童詩2編）

23・藤井くん，白井くんがんばれ（22に対する感想文17編）

24・パッチンとぼく（児童作文4編）

25・わたしの文集（個人文集の“あとがき”8編）

26・あとがき

第3号（昭37・3・23）

27・詩を読もう：1「さようなら」国分一太郎（感想文18編）

28・詩を読もう：2「せみ」丸山薫（感想文8編）

29・詩を読もう：3「わらわれたっていいのです」辻田東造（感想文6編）

30・詩を読もう：4「地球一周鈍行列車」無着成恭（感想文9編）

31・詩を読もう：5「むかしばなし」百田宗治（感想文12編）

32・「めざめる日」を読んで，私はこう思う（感想文12編）

33・かおがあつくなってあせがぶるぶるでた。舞台にでてもおもったこと（児童の短文9編）

34・わたしのくせ（児童作文3編）

35・はやく大きくなりたい（児童作文3編）

36・番組のとりあい（児童作文2編）

37・あとがき

上の目次（“一枚文集”の見出し）から，それぞれの“一枚文集”がどのような意図をもって編集されたかを推察することができる。

「生活の変化に目をつける綴り日記を続けよう」・「書きなおすと作文はよくなる」・「詩にはどんなことを書くか」等のことばは，児童に，それぞれの“一枚文集”をどのような視点で読読み，何を学ぶべきかを示している。

文集に取り上げられている児童の作品の一つ一つに，鎌谷嘉道氏の“評語”が添えられている。

それは、書き手の児童に対する語りかけの形式をとるものと、読み手の児童に“話し合い”のための視点を示すものとの二つにわけることができる。

いま、書き手の児童に対する語りかけの形式をとる“評語”の例を取り上げる。

しごと 小林 正

きのうのばん11時ごろ

おとうちゃんが帰ってきたった。

あさ

「どこへいっていったんやえ」

というと

「月の上でしごとしよったんよ」

というたった。

「うそばかりいうてじゃ」

といった。

きょうも またこうべへ^{ママ}いてや。

(おとうさんのしごとがこうべにできたのですね。よかったね。)²⁾

きしゃごっこ 青田里代

べんきょうをしていたら

きしゃごっこをしよったった。

わたしとこのせめんとがえきだ。

わたしは、「よして」というと

「よしたげろ」と

きみちゃんとみどりちゃんが

声をそろえていうたった。

のしてもらって、さかのほうへ

しゅっぱぽ、しゅうぽぽと

さかをあがっていった。

(里代さんがこうしてみんなと遊んでいるのかと思うと、とてもうれしいな)³⁾

ここでは、表現についてはふれられず、書き手の児童に対する共感・共鳴だけが示されている。また、読み手の児童に、“話し合い”のための視点を示す“評語”は、次のようなものである。

水谷晴美

「ただいま」

と学校から帰った。

「おかえり」

とおかあちゃんの元気なこえがきこえてきた。弟が①

「ねえちゃん、おかえり。あんの、ねえちゃん、ぼくほいくしよの帰りにあめを二つおとしてひろいにいったら、三つもひろったんやぞ」

①弟のこの会話をよく思い出して書いたので、その場のようなすや弟のようすまでわかるような気がするね。こういう特色のある会話を思いだすことがたいせつだ。

と、じまんをしていった。

おかあちゃんが

「はるみ、べんきょうしてから、あそぶんやったらあそびよ。」

といたので、

「うん。」

といて、②べんきょうした。

「ぼくも、べんきょうせんけ。」

という③

「ぼく、もうよしゅうしたさけん、おかあちゃんがもうあそんやでもええいったったんぞ。」

といて、あそびにいつてもた。いったあと、りえこさんとふみこさんがあそびにきたった。ふみこさんは、毛を2つにくくっていた。④

おてらでかくれんぼうをした。りえこさんがおにです。まさひこがきて、ミゼットラマネを持っていた。きれいなすなを集めていた。それから、草かくしをして、ふみはるちゃんがおにになった。

りえこさんが

「ふみはるちゃん、みよってだはあ。」

といたった。⑤・つぎに、わたしがみた。ふみちゃんが、

「も・う・ええ・だ……はあ……。」⑥

といた。

ふみはるちゃんが、まるいけたったけど、またおにやった。

②どんな勉強をしたかも書くとよい。

③どうしていた弟にいつたかも書くとよい。

④変ったことに目をつけて書いてるので、文字さんのようすがよくわかる。

⑤りえこさんが言ったのだからがだれがいつたかも書くほうがわかりやすい。

⑥この会話も、いつたようすがわかるように書いているね。

※ふだんと変った会話や、ふだんとちがうようすなどに目をつけて、それをおとさずに書くと、その場のようすがよくわかるように書けることがわかるね⁴⁾

上の児童作文は、「わかくさ」第一号冒頭の「きのうしたことを話したこと、どのように思い出すか」に取り上げられているものである。

ここで、鎌谷嘉道氏は、「評語」によって、読み手の側の児童に、「思い出して書く」という視点から、この作文の持つ優れた点と不十分な点を指摘している。読み手の側の児童は、この作文を中心とした「話し合い」によって、「評語」の内容を理解し、「評語」の指摘にそった作文の研究を深めていく。

このような、作文を中心とした「話し合い」について、鎌谷嘉道氏は、次のように述べている。

ここにのせることができた作文は、けっして書いた人ひとりの作品ではない。これらの作品はみんな学級で読み、はなしあった作品だから。だから、これらの作品をみんなでだいじにし、これを土台にして、2学期の勉強をすすめたい。

それに、ここにのせた作文は、みんなの書いた作文のなかで一番すぐれていた作文でもない。そ

のときそのときの勉強のめあてにあった作文を、みんなで勉強する材料としのこせたのだから⁵⁾

文集に取り上げた作文についての“話し合い”によって、「学級の者がお互いに理解を深める」—生活(集団)指導—とともに、「日本語で思ったことがすらすら書ける」—表現指導—ことがめざされている。

ここで取り上げた「きのうしたこと話したこと、どのように思い出すか」は、「わかくさ」第1号の冒頭におかれた“一枚文集”である。「わかくさ」第1号は、この、1の「きのうしたこと話したこと、どのように思い出すか」に続いて、2の「ポリコ、この題で思い出すこと考えること」、3の「思い出し競争、バスをおりてから」と配列されている。この配列から鎌谷嘉道氏が、その作文指導を、まず、「過去のことを過去形で書く」「生活文」—児童の生活に題材をとった作文—を「思い出して書く」ことからはじめていることがわかる。

このような、「思い出して書く」ことからはじめられる“一枚文集”の構成は、他にもその例がみられ、鎌谷嘉道氏の文集を用いた作文(綴り方)教育の、一つの方法とされていたことが推察される。

鎌谷嘉道氏は、このような「過去のことを過去形で書く」「生活文」の指導のうちに、「長いあいだに経験したことをまとめて説明ふうを書く」「生活文」の指導をおこなっている。

※注一「たけのこ」第2号—昭34・12・24—に「生活文の書き方には、過去のことを過去形で書く、長いあいだに経験したことをまとめて説明ふうを書く、の2つがあります。」(7ペ)とある。

鎌谷嘉道氏は、「わかくさ」第3号、34の「わたしのくせ」で、この2つの文章の違いを、次のように説明している。

いままで書いてきた作文は、たいていあるひとつのできごとを時間の順序に思いだして書いていくという作文が多かった。しかし「わたしのくせ」という題で書く作文はちがうね。自分のこれまでの生活をふりかえって、いろいろなできごとのなかから、自分のくせをぬき出して書くのだからね。自分のくせをぬきだしてくることからしてたいへんだ。

自分のくせをあげたら、そのくせがいちばんよくわかるできごとを例にあげて書いていくようにすると、よくわかる作文になる。こういう作文を書く場合、つぎのような順序だって考えて、メモしておいて作文を書いていくとよい。

- 1・自分のくせについて考える。
- 2・自分のくせを書きだしてみる。
- 3・悪い点だけでなく、よい点も考えてみる。
- 4・くせのひとつひとつについて、よくわかる例を考えてみる⁶⁾

上のように述べたあとに、展開の異なる3つの作文を、次のように取り上げている。

私のくせ 構 たつ子
わたしは、すぐ口をあける。
まえでも、おかあちゃんに「たつ子、おおきい口をあけて。つまいとんな。」

構さんは自分のくせのなかの1つをつかまえて、そのくせについて、いろいろ書いています。くちをつまえ

といわれた。わたしは、そういわれるのがだいきらいだ。でも、わたしはなんどみるんでも、すぐ口をあけてしまう。くちを一の字にするときは、そないもない。

わたしが口を一の字にしていると、
「やあ、かまえさん、すまいとってだはあ」といわれる。

どうして、私はすぐ口をあけるのだろう。

大きいねえちゃんや小さいねえちゃんは、私に、
「大きい口あけてみと。」
という。おかあちゃんが、ちゅういしてくれてのときだけ、一の字にして、いうてもたったら、また口をあけている。

このまえ、ちょうかいのときに、校長先生が
「くちを一の字にしておきましょう。くちをポカーンとあけていたらめんどいから、口を一の字にしよう。」
といわれた。

けど、わたしは、くちをポカーンとあける。わたしのくせはこれだ⁷⁾

ぼくのくせ 後藤実己

ぼくには、いろいろのくせがあるけれど、よいことのくせはなにもない。

ぼくは、じきに、「どけいな。」というくせがある。いわんごとおもっていても、じきに口に出してしまう。

かいだんをあがっていて、むこうのものがぶつかってくると、「とぼけな。きを、つけ。」
といってしまう。

このまえ、ぼくがあいてにぶつかったときでも
「とぼけな。きをつけ。」
と、あいてにいつてしまった。

もう一つは、びんぼうゆすりをすることがおおいことだ。ばんごはんをたべているとき足があつかったら、しらんまにからだをゆすっている。

おとうちゃんから、
「びんぼうゆすりをしたらあかん。」
と、よくおこられる。

また、ぼくはよくうたをうたうくせがある。

ふろで「南海の美少年」をうたっていて、おかあちゃんから、
「いまなん時やと思とってんや。」

といわれることがある。

ていると、「すましとってだはあ」といわれることや、校長先生のおはなしなどまで書いているので、内容の多い作文になっています。

実己くんは、自分のくせを3つあげて、その1つ1つについて、かんとんに例をあげて説明していますね。

また、ねとってほんをみながらうたをうたいよって、
「よそね、ねとってのに大きなこえでうたをうとうて。」
とっておこられる⁹⁾

ぼくのくせ 藤原一郎

ぼくにはくせがたくさんある。
いま考えてみると、チエツというときがたくさんある。
学校から帰って、おかあちゃん、おやつあるときいたら、
ないからかってきてといわれる。
そんなとき、チエツといってしまう。
また、学校で算数の勉強があったとき、先生が、
「これ、とける人ありませんか。」
といわれた。平夫君、実己君、勝君、一幸君、ぼくも手を
あげた。勝くんがぼくのそばにいて、
「一郎君、これやの。」
といった。あっと思った。勝くんとぼくのこたえがちがう
んだ。ぼくは手をおろした。先生がへんなかおをして、ぼ
くのほうを見られた。
ぼくは、あとから答があっていたから、しまったと思っ
た。ぼくは勝くんにひきつけられたのだ。自分が正しい
と思ったことは、さいごまでおしとおさなければいけない
と思った。
ぼくは、おとろしいと思うときがある。その時は、すぐ
外へとび出てきたえる。そしたらおとろしくないのだ。こ
のごろよくおかあちゃんにたのまれて、夜ようじに行く。
じてんしゃにのって行く。あるいていくときは石をもつ。
このごろはだんだんなおっているのであんしんだ。
くせをなおすときは、力いっぱいささなければならなら
ないと思う⁹⁾

藤原君は、自分のくせということ
を考えているうち、自分は正しいと思
っていても、つい人につられるとい
うことを見つけだした。これは、た
いへん深い反省だ。すぐにあたまを
かくというようなこととちがうね。
そこがこの作文のねうちだと思うね。
また、くせをなおすことにふれて
いるのもよい。

ここにみられる「長いあいだに経験したことをまとめて説明ふうを書く」指導は、「わかくさ」以
外の文集でも、そのほとんどが「過去のことを過去形で書く」指導がある程度おこなわれたのち一
2学期以降一に、取り上げられている。

三

鎌谷嘉道氏は、「日記」を書くことの意義を、「三学期も日記を書こう」・「生活の変化に目をつけ
る綴方日記を続けよう」・「書くだけのねうちのあることを・日記の書き方」等の「一枚文集」のな
かで、くり返し、次のように述べている。

夏休みに日記を書いた人は、それだけでずいぶんよい勉強になったと思います。一学期したようにぜひ二学期にも日記をつけましょう。

それでは日記はどのようなふうを書くか。めいめいが思うままに書いたらよいのですが、大体のめやすとして、

- 1・その日あったことのうち一ばんころにのこっていることがらについて、よく思い出して書こう。例へば、子もりのことだとか、弟とけんかしたことだとか。
- 2・自分の言ったこと、したこと、ひとの言ったことなどを、ありのまま書くのですが、そのとき自分の思ったこと、又今になって自分の思うことなど、つまり自分の考も書くとほんとうによい日記になる。¹⁰⁾

生活の変化に目をつけて、わたしたちの生活をみつめ、そのことを日記に書きとめていくようにしましょう。毎日でなくてもいい。これは書いておこうという生活の変わり目に目をつけて、最低1週間に1日、できたら2～3日、綴り方日記を書いて出してください。¹¹⁾

2学期の新しい仕事・毎日日記を書く。

日記を書くときの約束

- 1・1つのことを書く。
- 2・毎日：書き出しを変えて書く。
- 3・したことだけでなく、思ったことや考えたことも書く。¹²⁾

このような日記指導は、日常的な生活に目を向けさせ、新しい生活の発見と自己の深化・拡充をおこなわせる、場となる。また、書くことに慣れさせ、必要な文章表現（力）を修得させる場ともなる。

児童の書いた日記は、週1時間の「作文の時間」に書かれた作文とともに、学級での“話し合い”の素材として、次のように、文集に取り上げられている。

6月8日

奥平昇二

がっこうから帰ってすぐカバンをおいて、田んぼへいきよったら①大西君とでよた②

大西君もいそがしそうに、③自転車のうしろにくさかりかごをのして、とぼしよた。ぼくもはしていった。

田んぼへつくと、むぎはかってあったけど、だれもいなかった。すこし、④ビスケットをくいながら、かっていたら、おかあちゃんがきたった。ちょっとすると、また、ねえちゃんが自転車で朝子（いもうと）をのせてきた。

⑤朝子はきのう、リヤカーのくるまに足をまきつけたのだ。おかあちゃんはいつも、

「リヤカーにのったらあかん」いよってのに、朝子がよこからポンとのって、足をいためたのだ。

ねえちゃんは、朝子をむしろの上において、むぎをかつ

①どこで

②大西君とであったことを書いたので、いくときのように見えるように思う。

③④くわしく書くとは、こういうようにだいじなことをよく思いだして書くことだ。

⑤朝子さんがけがをしたときのようすをもっとくわしく書いてほしい。

⑩以下のことも、まとめて、ここに書いておくとよい。

た。ぼくはかるのがおそいので、おかあちゃんにぬかされた。

むこうまでついたときは、ねえちゃんといっしょになった。⑥二回目かるときに、左手のひとさしゆびをきった。ぼくのかまがいちばんよくきれるかまであった。⑦とうとう、ぼくのかるぶんはすんだ。⑧

この田んぼは、小麦をつくっておられる。

かえりは、ぼくがあさ子を⑨のしていんだ。あしにほうたいをいっばいまわしている。あしがまきついたときは、どんないたさだったろう。⑩朝子は、大きいこえでないたので、すぐ、ひらいしさんのおいしゃさんにみてもらった。

自転車は、ゆっくり家のほうへと進んでいった。

※欲をいうと、仕事をしているとちゅうの昇二君の気持、ぬかされたときのこと、昇二君のぶんの仕事ですんだときの昇二君の気持ちなどがよくわかるように、会話などをいれて、そのときのようすを書くときよい。

⑥たいしたことはなかったらしいが、このときのこと、もうすこし書くときよい。「ぼくのかまがいちばんよく切れる」などと書いているので、よけいに気になるよ。

⑦この「とうとう」ということばは、およそなことばだよ。むぎをいくすじかって、いつごろに、どれくらいほねをおって、昇二君のぶんがすんだのかを、書いてくれるときよい。

⑧昇二君のぶんがすんだときのこと、それから、昇二君はどうしたかも書くときよい。

⑨なにに。

13)

上の日記は、「くわしく書く」ことを学ぶ“話し合い”の素材として、文集に取り上げられている。また、日記は、そこに解決しなければならぬ生活の中の問題（事件・出来事）が見い出されたときにも、文集に取り上げられ、“話し合い”の素材とされる。

このような生活の中の問題（事件・出来事）を取り上げた“一枚文集”は、「芽ばえ」の中に、次の3例がみられる。

1・はだかにされた中本君

19・20・けんか・「けんか」を読んで

30・31・卒業記念品・「卒業記念品」を読んで

上のうち、1の「はだかにされた中本君」は、理科の「からだのほねのはたらき」の学習の際に“中本君”を「見本にした」という事件（出来事）をめぐるものである。

それは、次のように構成されている。

「はだかにされた中本君」（児童作文1編）

- ・実物の方がよくわかるからだと思う。（児童の短文2編）
- ・やっぱり先生がいけないと思う。（児童の短文1編）
- ・人体もけいであるほうがよい。（児童の短文3編）
- ・「ちょっとはずかしいがでよう」というのだったらよい。（児童の短文1編）
- ・先生はどういうつもりでしたのでしょうか。（児童の短文2編）
- ・「女の子にもやらせる」ということについて。（児童の短文5編）

このような、生活の中の問題（事件・出来事）を取り上げた“一枚文集”は、「芽ばえ」の他にも27例が見い出される。

これらは、書くこと、書かれたものの機能を十分に活用して、文集を生活指導の上にも働くものとした指導といえる。

このような、生活の中の問題（事件・出来事）を解決するための“話し合い”は、また、作文指導の場としての機能も、あわせ持っていた。何について、どのように考えるべきかを知らせ、また“話し合い”によって、思考や認識を深化・拡充することは、一面、取材指導・表現指導……ともなっていたのである。

四

鎌谷嘉道氏の刊行された文集を特色づけるものの一つに、春・秋の農繁期休業の時期に刊行される“農業”を取り上げた、説明文・意見文を中心とした“一枚文集”がある。

「青空」第5号一昭43・7・15一は、「日本の農業・特別号」として合冊されたものである。

「日本の農業・特別号」は、次のように構成されている。

- 1・わたしの家の農業
- 2・麦の取り入れ
- 3・田植えについての報告
- 4・田植えまで、日記から
- 5・田植えのしごと
- 6・ことし作っている稲の品種
- 7・農業機械についての調査、まとめ
- 8・むかしむかしの米作りの話
- 9・すこし昔の米作りの話
- 10・あとがき

1の「わたしの家の農業」には、それぞれ児童の家庭よ農業の様子が（耕地面積・主に働く人・労働の様子・農業の収支とその他の収支・意見等）、次のように取り上げられている。

○美恵子さんの家の場合　わたしの家は田が1ヘクタールと、畑が0.8アールです。ふだん田畑の仕事をしているのは、おかあさんやおじいさんです。おとうさんは、福岡こうむ店につとめています。朝7じごろ家を出て、夜六時か七時ごろ帰ってきます。でも、いねかりの時は、おとうさんも休んでします。

田植えは、ずっと前からしんせきといっしょにして、家族みんなです。でも、ほかの家にくらべると田が多いので、少しはおくれます。

むかしは、牛で田をすいたり、草取りも手でしていましたが、今はこうんきや農薬を使うので、せわもらくになり、手まもはぶけるようになりましたが、肥料代や農薬代などに支出も多くなりました。

収入では、麦も少しつくりませんが、米を売った収入が主です。

むかし、わたしの家は、おかあさんがきてのまでは、農業だけやったそうです。それに会社と農業のどちらかをやめて、一つの仕事にする場合は、会社をやめるといっておられ

ます。

支 出			収 入	
その他 30%	農業にかか る費用20%	生 活 費 50%	米による収入 45%	会社の収入 50%
			雑 5%	

14)

○穀君の場合 ぼくの家耕地面積は、田が0.73ヘクタールです。農業をするのは、父母と電々公社へいつているにいさんです。田うえや稲かりの時は人手がたりないので、りんじに人手をたのんでいます。

米作のしごとはこうん機でします。4月になると田おこしをして、5月になると田に水を入れてしろかきをして苗代にたねをまき、そしていそがしい田うえです。いねのそだつ間、農薬を7回ぐらいし、草とり薬を1回します。

農業だけの収入ではくらししていけませんので、父は姫路市内で、人をたのんで小さな事業をいとなんでいます。

農業や肥料や農業機械の代金がたくさんいると、父母が話しています。

農業はしごとがはげしいうえ、収入が少なく、支出が多いので、町へはたらきに出る人が多くなったと思います。

収 入		支 出		
農業以外の収入 60%	米による収入 40%	雑 15%	農業にかか る費用25%	生 活 費 60%

15)

また、3の「田植えについての報告」には、「田植え」の計画と実際とが、次のように記されている。

報告 3 稲積泰三

—田植えの計画はどうなっているか—

ぼくとこは、作付面積は34アールだ。雨がふらないので、水がはいりにくい。

ぼくねは、6月げじゅんに田植えをする予定だ。

田は水もちがよい。人手はなくても、おとうさんとおかあさんでしてやからよい。

—田植えの実際—

田植えの4日まえに、一つの田んぼに水をためとった。

6月24日に池の水がおち、6月25日に田うえがはじまった。24日のひるから、なわしろのなえひきをしたり、田をうえるように、こうん機で田うえのよういをしておられた。

25日に雨がふったので、ほかの田にも水がはいりました。田うえのあさは、5時にいきました。25日に雨がふったので、田うえがじゅんじょよくできた。雨のため、ほとんどの田

に水がはやくはいったので26日に田うえがおりましたが、かいこんの田は、水がおそくてこまりました。28日のひるから水がはいったので、ひるからなえをとって、4アールの田をばんまでかかって、ようやく田うえがおわった。

田うえがおわったので、おかあちゃんもおとうちゃんも、やれやれといっておられた!¹⁶⁾

報告4 坪田明美

一田植えまで一

わたしこの作付面積は、90アールです。まだ池の水はおちていませんが、ひくみのひくいところでは、きのうから田うえをしておられます。池のもりの水で、みんな植えておられます。わたしの家も18日から田うえをされました。わたしの家では、しごとについている人が多いので、だいたい中心になっているのは、おとうさんおかあさん。それにおよめにいったねえちゃんがてつだいかえってくれるそうです。つとめにいてるねえちゃんがしごとからかえってくると、てつだう時もあります。

一田植えのこと一

雨がふったので、思ったより早く田植えができました。

わたしの家では、おとうさんが田ごしらえをして、いつも2人か3人で植えられます。

ことは、大阪からねえちゃんとおにいさんと二人でてつだいにこられたので、大だすかりです。家の者は大よろこびでした。

田植えにかかった時間は、一まちで3時間ほどです。6月18日からうえて、27日に終わりました。かいこんの水がおそいから。わたしは、つなひきをしたり、なえ取りの手つだいをしました。田植えのけいこもしましたが、ねえちゃんのようにじょうずにうえられませんか。

一わたしの思ったこと一

なえは、いつも4～5本うえなければいけないと思いました。また、なえをふかくささないこと。よぼうしてのときにあるいてのとこを、ちょっとひろく植えてあるのに気がつきました!¹⁷⁾

農繁期に“農業”を取り上げてこのような文集を刊行することは、児童に、地域の農業（労働）に関心を持たせ、考える機会を与えるようとするものであった。それは、また一方で（取り上げられている児童の作文に見る限り）説明文・意見文の指導ともなっていたと考えられる。

鎌谷嘉道氏は、まず、“日記”によって「過去のことを過去形で書く」指導をおこない、それを“作文の時間”での「長いあいだに経験したことをまとめて説明ふうを書く」指導へと発展させている。さらに、そのような生活文の指導とともに、農繁期を利用した「日本の農業」等の説明文・意見文の指導をもおこなっている。

一般に、文集を用いた作文（綴り方）教育は、生活文の指導のみに終始しがちである。鎌谷嘉道氏の、生活文を基盤としながら、それを説明文・意見文へと発展させる指導は、氏の実践の一つの特色といえる。

五

鎌谷嘉道氏の指導された文集15種のうち6種は、6年生を対象としたものである。いま、これらの6年生を対象とした文集によって、卒業文集がどのように作られていたかを考察したい。

6年生を対象とした文集の最終号から、卒業文集に該当する“一枚文集”を取り出すと、それは、次の20編になる。(各“一枚文集”の番号は、引用者が付したものである。)

- 「たけのこ」第6号—昭31・3・10—
 - 1・私の成長の記録
 - 2・詩集：思い出と希望
 - 3・学級座談会：思い出を語る
 - 4・学級の歴史
- 「麦ぶえ」第3号—昭34・3・23—
 - 5・思い出集
- 「芽ばえ」第3号—昭36・3・23—
 - 6・思い出：一番心に残っていること
 - 7・卒業記念品
 - 8・「卒業記念品」を読んで
 - 9・10年後のぼく10年後のわたし
- 「えんぴつ文化」第4号—昭38・3・20—
 - 10・先生方のことば
 - 11・学校生活の思い出
 - 12・時間中のいたずら
 - 13・13年後のぼくわたし
 - 14・ぼくわたしのすきな勉強
 - 15・一番心に残っていること
 - 16・えんぴつ対談：卒業
 - 17・一口さようなら
- 「友だち」第3号—昭39・3・23—
 - (なし)
- 「城」第5号—昭42・3・20—
 - 18・思い出の記
 - 19・仰げば尊しわが師の恩：先生の思い出
 - 20・わが尊敬する友だち

上の各“一枚文集”のうち、2・5・6・11・13・15・18・19は、小学校入学以来の、あるいは6年生1年間の“思い出”を集めたものである。また7の「卒業記念品」、8の「『卒業記念品』を読んで」は、児童が担任である鎌谷嘉道氏に卒業記念品を贈ろうと計画していることに対して、“本当の卒業記念品とは何か”を問いかけた氏の創作物語と、それを読んだ児童の感想文とで構成されている。

20の「わが尊敬する友だち」には、次のような児童作文が、6編収められている。

泉さんとあゆ子さん 坪田美奈子

尊敬し、信頼している友だちは、2組で二人いる。なぜ、2人いるかという、その友だちのいろいろな面を尊敬しているからだ。だれかという、泉さんとあゆ子さんだ。

わたしは、泉さんのこういう面を尊敬している。

それは、わたしたちのしなくてもいいことや、しなければいけないことを、ほかの子がわすれていない時など、ちゃんとしているやさしい気持ちだ。

しかし、泉さんには、短所もある。わたしから見ると、少し短気なのだ。性格はわたしに似ていると思う。ほかにも欠点はあるけど、文には書きにくい。

あゆ子さんの尊敬している面は、底ぬけの明るさと、話していても、何の気がねもいらなことだ。けんかをしていても、自然になかなかおりができる。そういうふんいきがあゆ子さんにはある。しかし、ふまじめすぎる時もある。でも、あゆ子さんの場合は、ふまじめすぎても、いやな感じはしない。

わたしは、2人とも信頼している。いろいろな面も尊敬している。また、友だちとしても、すばらしい友だちだと思っている。いつまでも、友だちでいたい。¹⁸⁾

これらの文集には、記念碑的な性格を持たせながらも、“回想”のみに終わらせず、中学校への動きのあるものにしようとする配慮がみられる。

「えんぴつ文化」第4号は、編集・孔版・印刷等のすべてを児童がおこなった、児童の、自主製作文集である。

この「えんぴつ文化」第4号の“編集委員長”をつとめた“青田勝”君は、その刊行経過を、次のように記している。

2月13日(水)の放課後、文集編集委員全員は、教室のかたすみで、第1回文集委員会を開いた。決ったことは、次のとうりである。

- 1・原稿集め完了 2月23日
- 2・原紙切り開始 2月25日
- 3・編集委員長 青田勝
- 4・どんな作文を書いてのせるのか
 - イ・ぼくのすきな勉強
 - ロ・これからの希望(詩の形で書く)
 - ハ・友達の長所短所
 - ニ・思い出のあだな(たのしいあだな)
 - ホ・一番心に残っていること(全員)
- 5・文集名は、委員で考えて学級会にかける
(一4行略一引用者)

ぼく達文集委員は、文集委員になってから、どうしても、この文集をしあげなければいけない……と、
ねっしんに……した。

けれども……，
 なかなかできなくて……，
 ようやく，先生に助けをかりて，
 3月19日にページあわせをし，
 製本屋にもっていった。¹⁹⁾

児童の自主的な取り組みによって，154ページにもおよぶ“卒業文集”が刊行されたのである。ここに，鎌谷嘉道氏が，文集を用いた作文（綴り方）教育実践によってめざした表現者像をみることができる。

六

以上，鎌谷嘉道氏の作文（綴り方）教育実践について，氏の刊行された文集を中心に考察してきた。

鎌谷嘉道氏が教職についておられた17年間，一度も途絶えることなく，15種類83冊3185ページにもおよぶ文集を刊行し続けられたことは，注目に価する。

これらの，文集を中心とした作文（綴り方）教育実践のうち，もっともすぐれた成果となっているのは，「過去のことを過去形で書く」ことから「長いあいだに経験したことをまとめて説明ふうを書く」ことへと発展させる生活文の指導である。それは，「くわしく思い出す」ことを中心としたものであり，前者は「日記」によって，後者は，作文の時間の「課題作文」によって，指導されている。このような，周到な生活文の指導は，（私の調査した限り）戦後，兵庫県下で刊行された他の文集にはみられないものであり，高く評価することができる。

また，「日本の農業」等の説明文・意見文の指導，回想的記念碑に終わらせない卒業文集の指導などには，学ぶべきものが多い。

鎌谷嘉道氏の刊行された文集一つ一つの持つ実践資料としての価値を，文集を中心とした教育実践の成果を示すものとして，さらに明らかにしていきたい。

〈注〉

- 1) 文集「たけのこ」第4号—昭30・9・20—「あとがき」 39ページ
- 2) 文集「麦ぶえ」第4号—昭31・11・26— 35ページ
- 3) 同 上 36ページ
- 4) 文集「わかくさ」第1号—昭36・7・25— 6ページ～7ページ
- 5) 文集「友だち」第1号—昭38・7・20— 「あとがき」 45ページ
- 6) 文集「わかくさ」第3号—昭37・3・23— 23ページ
- 7) 同 上 24ページ～25ページ
- 8) 同 上 25ページ～26ページ
- 9) 同 上 27ページ～28ページ
- 10) 文集「光の国」第4号—昭28・9・10— 4ページ
- 11) 文集「芽ばえ」第2号—昭35・12・24— 13ページ
- 12) 文集「城」第4号—昭41・12・24— 4ページ

- 13) 文集「芽ばえ」第1号—昭35・7・30— 14ページ～15ページ
- 14) 文集「青空」第5号—昭43・7・15— 4ページ
- 15) 同 上 5ページ
- 16) 同 上 19ページ
- 17) 同 上 19ページ～20ページ
- 18) 文集「城」第5号—昭42・3・20— 48ページ～49ページ
- 19) 文集「えんびつ文化」第4号—昭38・3・20— 153ページ～154ページ

<付記>

本研究にあたり、広島大学教育学部国語教育研究室には、貴重な資料をお貸しいただき、数々のご配慮をたまわった。また、鎌谷嘉道氏には、直接お話をいただき、ご助力をいただいた。記して深く感謝の意を表したい。

(昭60・4・10記)

(昭和60年4月15日受理)